

幼児期の安静の保持に関する学生が患児に実施したディストラクションの効果と改善点

日馬美保¹⁾、松井由美子²⁾、坪川麻樹子²⁾

1) 新潟医療福祉大学 看護学科

2) 新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】小児科病棟に入院する患児の多くは、採血や心エコー、X線撮影など安静の保持を必要とする検査を受ける。しかし、その必要性が理解できない患児にとって、検査を受けることは大きな不安やストレスの要因となる。私が小児看護学実習で受け持った患児は、母子分離による不安や理解力が乏しいことから検査・処置時に安静を保つことができず継続的な治療が困難となる恐れがあった。本研究では、小児看護学実習で学生が患児に実施したディストラクションを振り返り、患児に与えた影響と改善点を安静の保持と遊びの視点から考察したので報告する。

【方法】研究デザイン：事例研究

研究期間：平成28年9月26日～29日（4日間）

研究対象：小児看護学実習で受け持った1歳児Aくん

研究方法：実習で実施したディストラクションに関してAくんの反応を記述し、その効果と改善点について文献をもとに安静の保持と遊びの2つの視点から考察する。

倫理的配慮：ディストラクションについては、Aくんの保護者、受け持ち看護師、担当教員の了解を得て実施した。本事例研究にあたっては、個人の特定ができないように配慮し、個人情報の流出・漏洩が生じないように行った。ディストラクションの定義：処置や検査中に、子どもが自分の意識・注意・気持ちをどこに向けるのかを決め、処置などに集中しないように気を紛らわせることで、子どもの不安や恐怖を和らげるものとする。

【結果】1.事例紹介

1) 基本情報

<Aくん、1歳、男児、クループ性気管支炎>

家族構成：両親との3人家族 付き添いは母親、祖母

治療方法：吸入療法（ボスミン外用液0.1%、水溶性プレドニン10mg、大塚生食注20mg）、輸液療法（ソルデム3A輸液）

症状：①高熱、②咳嗽、③喘鳴、④陥没呼吸、⑤肺副雑音あり

受持ち時には解熱し、喘鳴や副雑音が聴取されるものの、自力呼吸が可能となっていた。

安静度：ベッド上で動き回りながら点滴ルートを嘔む、踏む、引っ張るといった行動がみられた。

2) ディストラクションの実際

時間：平成28年9月29日（実習4日目）

場所：Aさんのベッド上（大部屋）

内容：おもちゃで遊ぶことにより安全に治療を継続できることを目的として「型はめ遊び」ができるおもちゃ（写真1）を作成し、実施した。おもちゃは、Aくんの好きなキャラクターのデザインとして、口の中に積み木を入れて遊べるようにした。実施直前の胸部の聴診では、副雑音が聴取され3分間で咳嗽が6回みられていた。しかし、実施中では肺副雑音はみられるものの、喘鳴や咳嗽はなく、遊びに集中することができた。



【考察】1.安静の保持の視点から

写真1 型はめ遊びができる積み木と容器

二宮らは、0~1歳児に対しては「処置中、小児が心地よいと思える環境をつくることが重要であり、親が安心して小児を支援することが、小児の心の安定につながる」¹⁾と述べている。今回の事例では、学生が主体となって実施し母親や祖母に協力を求めることはなかった。しかし、Aくんの心理的援助を図るためには常に母親や祖母がそばにいてAくんの心の支えとなるような働きかけが必要であったといえる。よって、母親や祖母にもディストラクションに参加してもらうことで安心できる親の存在を感じられるよう援助するべきであったと考える。

2.遊びの視点から

おもちゃを見せるとAくんはすぐに興味を示した。これより、Aくんの好むキャラクターをおもちゃに取り入れることで、興味を持たせることができたと考える。河合は、「愛着のあるキャラクターを用いたプリパレーションは、治療への関心を高め、意義を理解することに有効であり、アドヒアランス向上への一助となる」²⁾と述べている。よって、おもちゃの作成に関してAくんのお気に入りのキャラクターを取り入れたことは、興味・関心を引き付けるという点で有効であった。

【結論】1. 乳児期の児に対しては、常に母親など安心できる親の存在を感じられるよう援助することで児の心の安定につながり、安静を保ちやすい。

2. ディストラクション実施時は、患児の好きなキャラクターを取り入れることで、患児の興味を引きやすい。

【文献】

- 1) 二宮啓子, 今野美紀: 小児看護技術 第5版 子どもと家族の力をひきだす技, 株式会社南江堂, 64, 2012
- 2) 河合聡美: 愛着のあるキャラクターを用いたプレパレーションによる効果, 看護教育, 50(8), 716-719, 2009.